

## 第3章

# 着モノ

サナア旧市街の正面、イエメン門付近は背広、男性用ワンピース、マシヤッタ、ジャンピーア等を売り買いする人でにぎわっている。イエメン門脇の護衛塔の銃眼から外をのぞいたところ。



ザンナ（ワンピース）

アラブ男性の衣服といえば、寸胴の貫頭衣に袖をつけた程度の簡単なつくりのワンピースである。これはアラブ世界ではかなり一

般的な普段着で、国により、地域によりさまざまなバリエーションがあり、呼び名も一定していないが、ワンピースという点は共通している。「アラブ」と言ったときに平均的日本人が思い浮かべるのは、頭から白い布をかぶってその上に黒い輪っか イカール を載せ、白いだぶだぶのワンピースを着て立派なあご髭をはやしたでっぷりしたアラブ湾岸諸国の石油成金の姿かもしれない。イエメンで着ているものもこれと基本的には同じである。サウジアラビアでは ディシュダーシャ、エジプトでは ガラベーヤ などと呼ばれ、裾丈はたいていくるぶしくらいまでで、ある程度裾に向かって広がったスカート状になっている。サナアでの一般的な呼称は「ソウブ」あるいは「ザンナ」である。ソウブとは本来のアラビア語では「衣服」一般を意味する。

暑いのになぜわざわざ長袖を着て、くるぶしまで覆わなければならないのかと思うのだが、実際にこれを着てみるとゆったりして皮膚との間にかんりの空間があるので身体に適度に風が入ってくるし、乾燥して痛いほどの灼熱の太陽の下では肌の露出が少ないほど涼しいのである。ソウブを着るときの下着はランニングシャツとパンツのみだが、ステテコ

のような下ばきをはくこともある。イエメン人は海水パンツのように派手な柄の下ばきをよくはいている。いちばん安いのは中国製である。

ザンナの色は白が基本だが、白は汚れやすいので晴れ着、よそ行き用として用いられることが多く、日常よく使われるのは茶色、ベージュ、水色などの比較的汚れが目立たない淡色である。エジプトなどでは縦縞のガラベージャもあるようだが、イエメンでは今のところ無地しか見かけない。素材は湾岸諸国では薄手の綿、シルクなどだが、イエメンではやや厚手の木綿が化繊が多い。これは経済力の差と労働内容の違いを反映している。

ザンナは普通みぞおちあたりまでボタンがついたいわゆるブルオーバー形式になっているが、襟はワイシャツのようなどがった襟が基本だが、おしゃれな人はスタンドカラーにする場合もある。お隣のオマーンでは襟はなく丸首で、襟ぐりに縁どりの刺繍がしてあり、第一ボタンの位置に房がついている。

袖は通常長袖で、袖先にはボタンがついている場合が多いが、高級品はカフス穴がついている。これはもっぱらサウジアラビア・湾岸諸国の金持ち用である。また、夏用としてたまに半袖のザンナもある。

ザンナはミシンを使った「仕立屋」がオーダーメイドでもつくってくれる。仕立屋はも



大きな袖を後ろで結んでトゥーザを差し、イマーマと肩掛け布で盛装ができあがる。(サナア旧市街にて)

ととも比較的身分の高い仕事だったそうで、サナア旧市街にも仕立屋が並ぶ一画があり、軒先に出来合いのザンナが吊してある。一方、サナア新市街の中心、タハリール広場あたりで歩道に並べて売っているのは中国製の既製品で、こちらは仕立屋でつくるよりかなり安い。衿がやたらに大きかったり、袖が筒袖だったりしてあんまり素敵ではない。

内陸部のベドウィン（遊牧民）は、袖の部分が和服の振り袖のように大きなザンナを着ることがある。おそらく砂漠の灼熱の気候のなかで生まれた生活の知恵なのだろう。また、

サナアでもカーディー階級の人たちはこれまた大きな袖のザンナを着て、この両袖を首の後ろに回して結ぶ、という出で立ちをすることがある。この場合は肩から鮮やかな色の布をマフラーのようにぶら下げることが多い。なぜこのようなまったく機能的でない格好をするのかはよくわからない。カーディーは宗教知識人であると同時に裁判官でもあるから、裁判の公正さと関係があるのかもしれない。袖をたくし上げることで、「袖の下を取ったりしない」ということの表明をする、などというのはどうだろう（断っておくが、これはあくまで当てずっぽうである）。

#### 背広とアラブ商人

日常生活や農作業などはザンナー一枚で間に合うが、出掛けるときは背広を着るのが近頃の山岳部イエメンでは「フォーマル」になっている。

しかし背広は本来ヨーロッパのものであり、これとザンナの取り合わせは、他のアラブ諸国ではあまり見かけないスタイルである。イエメン人が背広を着るようになったのもアデンがイギリスの植民地になった十九世紀半ば以降のことであろう。ただ冬の朝晩の冷えこみの厳しい山岳地では、もともとザンナの上に羽織るモノが必要で、伝統的には山羊・羊の毛皮を縫い合わせたロングコートが用いられてきた。今でもサナア旧市街にはこのコ



イエメン門内側の背広売り。肩から何枚も背広を着ているのが売り子である。

ト屋が何軒か軒を連ねている。そういえば、ザンナの上に着る背広も コートと呼ばれている。また、内陸部のベドウィンは山羊・羊の毛で織ったベストを着用していることもある。

イエメンの仕立屋の背広づくりの腕はあまりほめられたものではない。そこでいきおい輸入となるのだが、サナア旧市街の入口で頭の上にこの輸入背広を三〇枚くらい重ねてかぶり、動くハンガーとなつて売り声をあげている背広売りはサナア名物と言つていい。彼らの頭の上に積み重なっているのは古着で、なかには裏ポケットの所に山本とか渡辺とかいうネームが入っているのを見かけることがある。日本から直線距

離で一萬キロ、直行便の飛行機はもちろんなく、定期的に就航する貨物船もないこの地までいきたい、誰がどうやって持ってきたのだろうとかねがね疑問に思っていた。

一九八〇年代の末のことである。私が勤務先の研究所で仕事をしていると受付から電話が入った。困惑した受付嬢の声で「佐藤さんに外人の方がご面会です」という。はて、今日はとくにアポイントもなかったがと、電話口に出た。するとその「外人」はいきなりアラビア語で「アツサラーム・アレイコム」と始めた。どうやらイエメン人らしいことはわかった。しかし、日本に住んでいるイエメン人は大使を含めて一〇人程度しかいない。誰だろうといぶかしんでいると、「ハサンだよ」と言う。まさか、サナアのコーヒー商人である友人ハサンが突然やって来るとは思いもしなかった。事前の連絡など何もなかったのである。ハサンはほとんど英語はできない。それでも自分より少しだけ英語のできるイエメン人の友人をともなつて、商売をしにやって来たのだという。頼りといつては、サナアの日本大使館でコピーしてきた日本の「古着商」のリストと私の名刺だけである。

ハサンは言った。「日本から古着を輸入したいので、古着商に会いたい。最初は日本語のほうがいいから電話をしてくれないか」。これがアラブ商人なのだろう。その昔、東南アジアにイスラムを広めたのは彼らである。このハサンのようにかすかなつてを頼りに帆

船に乗ってやって来て、ほんのわずかな糸口から商売のきつかけを掴み、儲けを出して、そして地元の商人をイスラム教徒に改宗させていったのだろう。

そのとき初めて知ったのだが日本に古着輸出商社は一〇社ほど、それも東京近辺には三軒ほどしかなく、主に名古屋と大阪に本社がある。もとよりハサンは東京と名古屋、大阪の位置関係も知らない。私はリストにあった古着商社に片っ端から電話する。「実は、イエメンという国からこれこれという人が来ていまして、古着を輸入したいと言うことなのですが、一度会って話を聞いてやってくれませんか」。

これもそのとき知ったのだが、日本の古着は人気が高くいつでも品薄だそうで、「とても中東にまで回せない」「主にフィリピンに輸出している」そして「香港あたりに行けばあるかもしれない」ということであった。なるほど、そういうものなのだ。インドネシアのスラウエシ島のほんとにひなびたマーケットで売られていた、日本の中学生のジャージのお古もやっぱりこうしたルートで流れていったのだろうか。

「何でわざわざ日本から輸入しようなんて思ったんだい」と尋ねると、「今イエメンに出回っているのはヨーロッパからの古着が多いが、イエメン人にはサイズが大きすぎる。日本のものは仕立てもいいし、サイズがイエメン人にちょうどいいんだよ」と説明してくれ



た。言われてみれば、イエメン人はアラブ人のなかでは小柄で痩せている人が多い。日本から輸入したい物は車やラジカセばかりではないのである。

#### 腰巻きとシン

イエメンの男たちのみんながみんな、ザンナを着ているわけではない。

#### ドバードの海

南部、それに紅海・インド洋沿岸地方ではザンナ・スタイルよりも腰巻きスタイルが多くなる。おおざっぱに山はザンナ、海沿いは腰巻きと言

えるが、地域によってくつきりと分かれているわけではなく、双方を併用する人も少なからずいる。ただ、標高が下がるほど湿気、暑さが増してくるので上半身裸になったり、Tシャツなどを着たほうが快適だから腰巻きスタイルが多くなるのは自然の成りゆきである。

腰巻きには二種類ある。一つは縦一〇〇〜一二〇センチ、横一八〇センチくらい一枚布で マアワズ あるいは スマータ などと呼ばれる。もう一つは同じくらいの大サイズの布の短辺を縫い合わせて筒状になっている フータ である。アデン、ハドラマウトなど旧南イエメンではフータがよく用いられ、旧北イエメンではマアワズが多いようだ。ただし、昼間はマアワズで、夜寝るときは裾がばらけにくいのでフータ、という人もいる。

いずれの場合も基本的に布を外側にたくし込むことによって止めるだけだが、上手に巻

けばけつしてずれたり外れたりすることはないが、スークなどへ外出するときには小物入れなどがついた幅広のベルトを締めて固定することもある。裾は膝とくるぶしの間くらいまでで、ソウブよりも短めである。肉体労働の場合は、股を十分開けるのでザンナよりも腰巻き布のほうが活動的である。ザンナ・スタイルは役所の課長・局長クラスに多く見かけるのに対して、腰巻きスタイルは役所の要職の人にはあまり見かけないので、労働者としての性格が強いのもかもしれない。

普段はザンナを着ている人も必ず腰布を使う場所が一つだけある。それは ハンマームである。ハンマームは十六世紀の第一次オスマン・トルコの占領期にトルコ人によってサナアに紹介されたといわれるスチーム・バス（本来の意味のトルコ式風呂）の公衆浴場で、半地下の石積み部屋の蒸気を満たし、汗をかきかき身体を洗う。日本と違って入浴時にすっぽんぼんにはならないので、腰巻きが必需品である。海水パンツでもいいのだが、三助さんに身体を洗ってもらうときにパンツのなかは洗いくらいなので腰巻きが好ましい。そして入浴後汗が引くのを待ちながらマツサージを受けるために、湯上がり用にもう一枚腰巻きを持参するのが通である。

さて、マアワズの素材はやや厚手の木綿が主で、色は緑、紫、茶などの濃いめの無地が

ベースとなり、裾にあたる部分に帯状のプリントや刺繍がある場合が多い。また細い格子柄程度のシンプルな柄もよく見かける。この布の両短辺はかがつてないので房状になっている。また、比較的高級品になると厳密には一枚布ではなく、同じ柄の布が二枚つないである場合が多い。マアワズの産地としてはサナアの南方のダマール、インド洋沿岸のシユクラなどが有名である。これらの国産品は輸入品に比べてかなり高い。

一方、フータのほうはマアワズよりは薄手の木綿、あるいは合織で、緑、茶などの地に大きめの格子柄や幾何学模様をプリントしてある場合が多い。値段はマ



ハドラマウト出身者のサナアでのカート・パーティー。ハドラマミーのくつろぎにはフータが欠かせない。

アワズよりも安めである。スークにフータを買いに行くと、ちょっと気のきいたデザインやしつかりした生地のはたいてい輸入品である。どこ製の布がいいのかと店の人に尋ねると即座に「インドネシア」という答が返ってきた。実は腰布もイエメンと東南アジアの交流の歴史を反映しているのだ。

イエメン東部ハドラマウト地方やさらに東のオマーンの人々は、かつてインド洋をまたにかけて活躍していた。現在のマレー・イスラム世界（インドネシア、マレーシア、シンガポール、フィリピンの南部など）に住むアラブ系の人々はほとんどハドラマウト出身で、ブルネイの王様もイエメン出身だということになっている。シンガポールの観光地の一つである「アラブ・ストリート」に店を構えているバティック屋のなかにはハドラマウトの名家の流れをくむものが多い。イエメンでインドネシア製の腰布が普及しているのは東南アジア帰りのイエメン人が持ち帰ったのがきっかけであろう。

ところでアラビアンナイトのなかに登場するシンドバードはアラブの船乗りである。シンドバードの冒険談が架空のものだとしても、その素地となる航海は実際にインド洋で展開されたものである。インド洋はアラブ人の支配する「シンドバードの海」であったのだ。東アフリカのタンザニア沖合にあるザンジバル島は、かつてオマーンの植民地であっ

た。そしてケニア、タンザニア、ウガンダにはイエメン出身の「アラブ商人」の末裔が今も活躍している。

フータは東アフリカから南アラビア、インド、ミャンマーを経て東南アジアに至るまで同じような形状と巻き方で分布している。その意味でこの「腰布文化圏」はシンドバードの海の記憶を今にとどめるものである。ついでながら、小麦粉を薄く延ばして、中に卵や野菜などを包みこんで焼くお好み焼き風の「ムタツバク」はサナアの街頭スナックとして人気があるが、同じものがやはり東アフリカから東南アジアにまで分布している。もともとインドネシアでは名前も「マルタバック」と変化しているが、つくり方は基本的に同じであり、シンドバードの海の二つ目の痕跡と言えよう。そして三つ目の痕跡が、イスラム教であることは言うまでもない。

### ジャンビアー

ザンナにマシャッダ、あるいはフータにコウフィーヤという男たちの出で立ちだけでも十分によそ者には珍しい眺めではあるが、イエメンを訪れる旅人にとって最もインパクトが大きく、エキゾチズムを感じさせるのは、多くの男たちが身体の正面に差している短剣 ジャンビアー であろう。「J」字状の鞘が、幅広のベルトのへその前の位置に縫いつけられており、そのなかに刃渡り二〇〜三〇センチの半月刀



断食明け祭りのジャンビーア・ダンス。(カウカパーンにて)

が収まっている。マシャツダが出身部族や地域を示しているのに対して、ジャンビーアはその持ち主の家柄、経済状態などをかなり如実に示すことがある。多くの成人男子は自分のジャンビーアを持っているが、日常的に帯刀しているのはやはり北部山岳部族の男たちである。

部族民にとってジャンビーアは「部族民としての誇り」を示すものだが、外国人にとっては「ジャンビーア・ダンス」のための小道具としてのほうが意味がある。ジャンビーアを振りかざしながら輪になって踊るこのダンスはイスラム教の祝祭日、結婚式その他の祝い事の間では必ずと言っていいほど踊られる。このダンスのステップは村により、地方によって異なり、勇壮さを強調するもの、優美さを強調するものなどそれぞれに味わいがあり、観光客にと



ジャンピーア職人。関連のある工程は同じ小屋の1階と半地下で分業している。ベルト職人と刃をつける職人。(次頁の写真ともサナア旧市街にて)

つてはイエメンらしさを演出する恰好のアトラクションである。

一方、サナアのスーク散策の目玉のひとつはジャンピーア・スークである。スークの中心に近い一画には、ジャンピーアづくりに関与するさまざまな職人が狭い間口を横に並べ、ときには上下に並べて作業をしている(小さな二階建ての工房があるのだ)。ここでは刃打ち屋、つか削り屋、つかの装飾屋、刃とつかの接合屋、ベルト屋、ベルトと鞆の縫いつけ

屋、鞆づくり屋、鞆の装飾屋等が隣接しながら完全な分業体制をしいている。

その気になれば、気に入った刃を選び(近くにはがね屋もある。刃はかつてはハドラマウトから届いたものだが、今はシンガポールからステンレスを輸入している)、刃と鞆の形状を選び、つかの材料選びと装飾の仕方(金

銀のちりばめ方)を注文し、鞆の装飾(材質、模様)、ベルトの刺繍(コーランのどの章句を書き込むか)まですべて特注で誂えることができる。もちろん、観光客や地方から出てきたお上りさんのための既製品も売られている。

値段はピンからキリまでで、既製品には日本円で千円ほどのものもあるし、大部族長の先祖伝来のジャンビアーともなれば時価数千円というものも珍しくない。

### ジャンビアーの品質

ジャンビアーの善し悪しを決めるのは、つか、鞆、ベルトの三つのパーツの素材と細工の具合である。肝心の「刃」については、日本刀なら「村正」だの「正宗」だの刃それ自体が重要だが、ジャンビアーに関しては刃







ジャンピーア（アシーブ）。ベルトにはコーランの章句が金糸で刺繍されている。

はほとんど意味をもっていないのでジャンピーアの善し悪しの判断には含まれない。

「つか」 ラースの部分は、拳一つがすっぽり納まるように握りの部分がくびれており、全長二丁一三センチくらいで、鞞に差した状態でつかがしらは地面と水平になる。つか

がしらの幅は新品で一〇センチ強ほどだが、

時代を経るに従ってちびていく。つかの素材としてはサイの角が最上とされているが、イエメンにはサイはいないので（かつてはイエメンにもサイやライオンがいたというのだが）、東アフリカから輸入されてきた。しかし周知のとおりサイの角はワシントン条約で輸出入が禁じられている絶滅保護対象であり、最近では入手は容易でない。そこで現在スークで売られているのは牛の角でつくったものが多いようだ。時々「キリンの角だ」と見せてくれることもあるのだが、真偽のほどは確かめ

られない。

つかの表側（外から見える側）の上下には通常二枚の金貨（あるいはそのイミテーション）が打ちつけられ、それ以外の部分には銀線が模様を描くようにはめこまれている。

ジャンビアは先祖代々伝承され、古さはつかを見ればわかるので、時代のついたつかを有するジャンビアは賞賛的となる。サイの角は掌でこすればこするほどあめ色のつやが出てきて「時代がつく」とされており、男たちはしきりにつかをなでさする。又ガムと呼ばれる特殊な草で磨いている人もいる。一年三六五日なでさすり、これが先祖代々繰り返されていると、さしものサイの角も相当にちびて、つかがしらがゴルフボール大くらいにすり減っているジャンビアも時々見かける。

つかの最も刃に近い部分（刃の接合部）には幅一センチくらいの銀の帯が巻きつけられていることが多い。また、ティハマやハドラマウトのジャンビアにはつか全体が銀細工で覆われているモノもある。

「鞘」には二通りの形状があり、いずれも二枚の木を合わせ、外側を革で覆ってある。通常の部族民 カビリー が差すJ字状の鞘に入ったジャンビアは アシープ と呼ばれ、カーデー（宗教知識人）やサイド（預言者ムハンマドの血を引く者）が差すのは

先端が跳ね上がらない緩いカーブの半月状のもので、トゥーザ、サナア方言で、ソウマ（スーマ）と呼ばれる（五八ページの写真参照）。アシープは細い緑色の革ひもがさらに巻きつけられているものが標準的だが、安物は茶色っぽい革で覆われておしまいである。一方トゥーザは皮で覆われた鞞の上に銀の飾り板がかぶせられていることが多い。銀細工は伝統的にユダヤ教徒の仕事であり、細かい細工が施されたものほど上等とされる。

ベルトは革製が基本で、ビニール製の安物もあるが、少し上等になると、金糸・銀糸でコーランの章句が刺繍されていることが多い。サナア旧市街のベルト職人はまず厚紙に石膏を塗って形を整えた芯をつくり、これに刺繍をした布を張りつけ、最後に周囲を青いピロードで覆って、バックルをとりつける。ベルトは何年かに一回、イスラムの祝祭のときなどに新調される。ベルトの芯が新調されても、由緒正しい金糸銀糸の幾何学模様が刺繍された布などは、代々使い継がれていることがある。

ジャンピアにはさまざまな小道具が付き物である。

ジャンピアの  
アクセサリー

まず、上等のジャンピアをしている人のベルトになると、さまざま  
な銀製の小物が縫いつけられていることが多い。主なものは円筒形の  
コーラン入れ、ヒルズ、平べったい半円形の小物入れ、マフファザ、そして球形あるい

は楕円形のアイシャドー入れ マクハラ などである。コーラン入れというのは、筒の中にコーランの章句を書いた紙を入れておくことでお守りの効果をもたせようとするもので、女性の胸飾りのパーツとしても用いられる。

J字状のジャンピア アシーブ には、しばしば太いゴムロープや鎖に通した鍵束がぶら下がっている。家の鍵や車の鍵であるうが、ザンナにしても腰巻きスタイルにしてもあまりポケットが多くないので、ジャンピアは貴重品をぶら下げのために重宝されるのである。そういえば、かつて日本でも男は和服の帯に財布やタバコ入れをぶら下げていたものだ。

一方、斜めに差す トウーザ には、鍵束をぶら下げのような無粋なことをする人はいない。代わりに知識人らしく数珠 マスバハ がぶら下がっていることが多い。この数珠は一個の珠ごとに区切りがあつて全部で三三個の珠からなっており、礼拝のときにアッラーの名を唱える回数数を数えるのに使う。庶民も礼拝のときには使うことがあるが、その素材で経済状態や家柄が示される。ラマダーン（断食月）中に町なかの交差点で売られているのは安物のプラスチック製だが、上等のものになるとイエメン産の紅玉髓 アギーゲや黒水晶などが使われているし、一つ一つの珠に銀線が埋め込まれているものもある。

部族長 シエイフ やカーディーの差すジャンビアの鞞の裏側には小さなポケットのような切れこみがあり、ジャンビアのつかとおなかの間にペンや小刀、あるいは炭をつかむためのピンセットなどが挟みこめるようになっていた。小刀 シッキーン の取っ手部分には長さ一〇センチほどの銀細工の鞘ケースがかぶさっていることがあり、これはベルトについているアクセサリーと同じデザインであつたりする。日本刀で言えば「脇差し」の位置づけである。また、シエイフやカーディーにペンと紙切れが必需品なのは、さまざまな陳情をしにやって来る人々の訴えを聞いて、しかるべき人に対して、「この者にこれこれの便宜をはかつてやってくれ」という手紙を書き、その場で陳情に来た本人に手渡すからである。

### ジャンビアの 禁 制 場 所

さて、今では外国人もスークで買ったジャンビアを差すことができ  
るが、本来ジャンビアは誰でもが差していいものではなかった。アラブ人は一般に父系の血筋を大切にす。とりわけアラブの源流を自  
任するイエメン人はサム(セム系民族の祖)を経由してノアにまで遡る血の純粋性を誇つ  
ている。そして、ジャンビアを差すことができるのは本来、この血筋のはっきりした  
「部族民」カビリー だけだったのである。

イエメンにおける部族民は、通常わずかでも自分の土地をもつ農民であり、そして戦士である。血筋のはつきりしないものは「非部族民」であり、農業以外のサービスマンに従事し、戦闘には参加できない。彼らはイエメン社会では部族民の保護がなければ生きていけない存在であって、ジャンベアを差すことは許されず、代わりに小振りの短剣を差していたという。



病院や映画館の入口には必ずジャンベアや武器の一時預かり所がある。1回10リヤル程度で預かってくれる。  
(サナアのクウェート病院にて)

したがってジャンベアは部族民の名誉の象徴であり、これを差している者は名誉を汚すような恥ずべき行いをしてはならない。この意味づけから派生して、ジャンベアは武器として以外にも、さまざまな使われ方をするようになる。

例えば、自分が何か約束したときや、借金のカタにジャンベアを置くことがある。

「自分の名誉に懸けて」という意思表示である。もっとも最近では借金のカタは時計のほ

うが好まれるらしい。

また、結婚式の夜、家の入り口に花婿の父や兄弟がジャンピーアを置いておき、花嫁がこれを踏んで家のなかに入ることが「家の主になる」という宣言と見なされるのだという。女性の権利が抑圧されていると思われるがちなイエメンにあつては、なかなか興味深い儀式ではないか。ただし、さらにそのあと床入りの前に花婿が花嫁の足を踏むことによつて夫の優位を確認する儀式が続くらしいのだが。

ところで、常日頃ジャンピーアを肌身はなさず差している部族民でも絶対に外さなければならぬ「ジャンピーア持込み禁止」の場所が町なかにはいくつもある。

それは、映画館、病院、学校、そして飛行場（飛行機のなか）である。それぞれに持込み禁止の理由はある。映画館は観客が興奮してふりまわすと危ないからとか、暗闇で仇討ちをしようとする者がいるかもしれないから。病院は患者の家族が医者に暴力をふるうといけないから。学校は学びの場だからだし、飛行機はハイジャック防止のため等々。

どれも一応もつともらしい理由である。しかし、いずれも「近代」的な施設であることが興味深い。「近代」とジャンピーアは相性が悪いのだろうか。それは近代が「誇り」を忘れた時代だからなのかもしれない。